

平成 25 年度大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	24J02	氏 名	長谷川真澄
研究主題 —副主題—	アジアの音楽文化と関連付けた日本音楽の指導 ～〔共通事項〕の視点をふまえて～		
所属校	足立区立梅島小学校	派遣先	東京学芸大学大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	本論文の研究目的は、音楽文化を〔共通事項〕と言われる音楽の諸要素や構成から捉え、日本の音楽文化の理解へ導く小学校における学びの方法と内容を提案するものである。 具体的な提案は次の 2 点である。 (1) アジアの音楽文化と関連付けた日本音楽の指導の意義を明らかにした。 (2) アジアの音楽文化と関連付けた日本音楽のカリキュラムを開発した。 伝統的な音楽文化の背景には文化があり、それが音楽の特徴として現れている。日本はアジアの一員であり、現在の子供たちにはアジアの文化を身近に感じ、その違いを理解しなくてはならない環境がある。本研究により、西洋音楽にはない日本とアジアの音楽の共通点と多様性、独自性を知ると価値観が広がり、生きやすくなる子供がいることと思う。また、発達段階に即して音楽観を拡充することにより自分の嗜好性に気付き、アイデンティティの確立に役立つと考える。さらに、選曲の幅が広がり、生涯にわたって音楽を愛好する態度と、様々な経験により感性の育成に役立つものとする。 これから国際社会で生きていく子供達には自国や相手の国で長い間大切にされてきた有名な音楽を体験する中でその特徴や音楽文化のよさを理解し、現代の教育課題となっている自尊感情とコミュニケーション能力を高めてほしい。また、集中して音を聴く体験を重ねる中で聴く力や言語他の文化に対する興味も高まっていくものとする。本研究は現代の教育課題に対応すると考え、設定した。
II 研究の方法	(1) に関して、第一章で「アジアの音楽文化と日本音楽を関連付けて指導を行う意義」、第二章で「音楽文化を〔共通事項〕の視点を踏まえて指導する意義」について、先行論文や学習指導要領、教科書の分析から明らかにした。 (2) に関して、第三章で実践事例とアンケート調査により指導の現状を分析し、課題を教科書の指導計画も参考に題材一覧やカリキュラムを開発した。第四章で検証授業や題材例について述べ、第五章でその成果と課題から本研究の意義を考察した。

Ⅲ 研究の結果

第一章では研究者の論より、次の意義が言えると考えた。

- ・ 日本音楽だけを学ぶより日本音楽とアジアの音楽文化を関連付ける方がもっと深く日本音楽の独自性・共通性・多様性から日本やアジアの音楽文化や文化を理解することにつながる。
- ・ 音楽文化の見方を広げることになり、世界の音楽文化や文化の理解にも発展する。
- ・ アジアの音楽は日本とも西洋ともつながっているので幼い頃から系統的に日本やアジアの伝統音楽に触れることは、感性を豊かにし、音楽を発展させる上でも、音楽に限らず相手の文化を理解し、尊重する心を育てる意味でも有効である。

学習指導要領の分析を参考に、「日本音楽の音楽文化に親しむ」ことを「目標」に、「他の諸民族の音楽と関連付けて指導する」ことを「指導内容」に入れることを提案したい。

教科書の分析からは、文化のくくりで行われている題材はあるが、アジアの音楽は低学年ではあまりないことが分かった。

第二章では〔共通事項〕の枠組みの中に日本音楽の文化を象徴する音楽的な諸要素や構成を組み込むこととその内容を提示した。

第三章では 79 名の実践者へのアンケート、『教育音楽 小学版』の分析より①本研究の実践の少なさと②本研究の課題が判明した。

第四章では、音楽文化の背景となる文化的要素と、〔共通事項〕を軸にできるだけ短時間で効果がある 48 題材を作成し、子供の発達段階に則したカリキュラムを作成し、その検証授業を実施した。

第五章では、4 題材（第 4 学年「いろいろな箏の音色を味わおう」、
「民謡を味わおう」、第 5 学年「アジアの音楽の文化って？」、第 6 学年「いろんな時代の雅楽を味わおう」）を第一章の研究者の論を参考に筆者が考えた下の本研究の効果 8 点を観点に、子供の発言や行動、ワークシートなどから考察し、その効果を検証した。

①生活や他の芸術とつながる音楽への意識への覚醒②音楽文化を音楽構造から捉えることの理解③日本音楽の特徴や日本の音楽文化の理解が深まり、愛着や誇りをもつ態度の育成に通じる④アジアの音楽の特徴がよくわかり、相手の音楽文化や文化を尊重する態度の育成につながる⑤自文化への意識の覚醒やアイデンティティの確立⑥表現力の向上⑦新しい音楽創造への可能性の拡大⑧アジア以外の世界の音楽や音楽文化、文化を尊重する態度の育成

実践検証から、この効果とカリキュラムの重要性も確認できた。また、次の三点についても確認できた。①日本の「音楽だけ」を教えようとせず、アジアの音楽文化や文化に目を広げると、そのまま世界にも広がること。②日本からアジアを見るだけでなく、アジアから日本を見てみるとまた視野が広がること。③地域的な横のつながりだけでなく、伝統の縦の軸を見ること。

IV 考察

以上を踏まえ、アジアの音楽と日本音楽に幼い頃から楽しく出会う題材を作成し、カリキュラムを作成することは、日本の音楽だけを学ぶよりも、日本やアジアの音楽文化の理解の基盤に立った愛着をもつだけでなく、音楽性の発展にも、アジアから世界の音楽への理解や文化を尊重する態度の育成にもつながると言える。

課題は実践検証数が少なく、学びの型やタイプの検証は不十分なことである。今後検証数を増やし、より完全な研究としていきたい。